



# 芝浦だより

ESD「持続可能な開発のための教育」～芝浦小学校を教材に～

校長 濱尾 敏恵

右の写真 A は、校舎内のある所を撮ったものなのですが、どこを撮影したものかお分かりになるでしょうか。これは、教室(オープンスペース側)の天井や壁を伝う配管を撮ったものです。配管には、色付けがなされ、何の役割を果たしているのか分かるようにしています。青色の配管には雨水が集められ、トイレに流す水や植物にあげる水に使われています。水色の配管には綺麗な水が流れ、使った水は茶色の配管を通過して捨てられます。また、ピンクの太い配管は冷たい外気を通し、隣にある灰色の機械で空気を温かくして教室に噴き出すしくみになっています。

本校には、年間、何人もの方が施設見学に訪れるのですが、先日は、本校の設計を手掛けた方が同伴で訪問された団体がありました。その際、設計士の方から、本校は『環境を校舎全体で学ぶエコスクール』をコンセプトの一つにして改築されたことを教えていただきました。配管を露出させたのも、空気や水の流れを見せることで、雨水利用などの設備の仕組みを学習できるようにしたいと考えたからだと言います。

このコンセプトに沿って、他にも多く、日常の中に自然環境を取り込む工夫がされています。例えば、主要な4つの階段には、「かぜ」「ひかり」「つち」「みどり」の名前がつけられており、「つち階段」には、土に触れることができる壁があり(写真 B)、「かぜ階段」には、風を見せるモービルが設置される(写真 C)など、それぞれ自然の4要素が感じられるつくりとなっています。また、メインのトイレには「光ダクトシステム」を導入し(写真 D)、本来光が届かない所に自然光を取り込み、太陽のエネルギーを効率よく利用しています。

これらの工夫は屋外にも及びます。屋上には自然換気効果を高めるために風速を速める誘導板が設置され、地中に埋め込まれた杭には地熱を利用するために温冷配管が通されているなど、屋上から地下まで省エネルギーへの実現を目指した設計がされています。

恥かしながら、着任2年目にして本校舎の環境に配慮した設計の詳細を知り、驚きと感動を覚えた次第でした。

環境に関する教育は、2003年に「環境教育推進法」が成立してから本格的に行われるようになりました。私も5年生を担当したとき、温暖化、オゾン層の破壊、熱帯林の減少、酸性雨、海洋汚染、ごみ問題、水質汚染、大気汚染などの環境問題を取り上げた授業を行いました。子供たちの環境に対する関心は高く、意欲的に調査活動に取り組み、環境の課題に関する知識と理解を深めることはできましたが、環境問題を「自分ごと化」させるまで高めていくことが難しかったことを思い出します。

そして15年が経ち、学習指導要領(平成29年度告示)において学校教育の役割として「持続可能な社会の創り手」となることができるようにすることが総則に掲げられ、全ての学校において、SDGsが目指す「持続可能な社会」の担い手を育てるための「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development: ESD)を推進していくことになりました。

ESDは、まさに「地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を身に付けるための教育」です。そのためには、地球上で起きている様々な問題は、遠い世界の出来事ではなく、自分の生活に深く関係していることを子供たちに意識付けることが重要になってきます。

今回、設計士さんの話を伺い、再生可能なエネルギーを積極的に取り入れている本校は、ESDを進めていく上で、優れた教材にもなり得ることが分かりました。機会を捉えて子供たちに伝え、コンセプト通り、「校舎を用いた環境教育」を実践していきたいと考えています。

6月の23日、24日は学校公開日です。進級して3か月が経ち、子供たちは、新たな環境にも慣れ、意欲的に学習に取り組み、友達とのかかわりを楽しんでいます。当日は、子供たちの活動の様子とともに、今回取り上げた環境に配慮した校舎の設備にも目を向けていただければ幸いです。



A 配管の見える化



B 土の壁がそびえ立つ「つち階段」



C 「かぜ階段」にあるモービル



D トイレの光ダクトシステム

トイレの入口